

「おはようございます、お嬢様」

よく通る低音によって意識が浮上する。ゆっくりと目を開けると、レースのカーテン越しに朝日が差し込んでいることが分かる。

——眠い……また変な夢見ちゃった……。

カーテンを開けた執事が天界付きのベッドの幕を同じように開けて、火照った身体で寝返りを打とうとしたわたしを覗き込んだ。どうやら二度寝を許す気はないらしい。従順で屈強な狼の獣人で、わたし専属の護衛兼執事のアルヴァンは優しく、そして頑固な響きでもう一度告げた。

「おはようございます」

「……おはよう、アルヴァン。いい朝ね」

爽やかな朝日を背負ってこちらを見下ろす端正な顔に笑みはなく、全くの無表情。でもべつに怒っているわけではなく、これが彼の通常運転なのだ。今は眉間に皺がないので、なんなら微笑んでいると捉えても差し支えない。その証拠にヘーゼル色の瞳が優しく細められた。

——わたしが悪いわけじゃないんだけど……あんな夢を見たあとだから、顔を合わせるのもなんだか罪悪感があるわ……。

ここ最近、わたしは妙な夢に悩まされている。大きな声では言えない内容……何かに身体中を舐められて気持ちよくさせられる、という夢を見るようになってしまっているのだ。夢とはいえ、一晩中いやらしい目に遭った後に、この整った顔を見るのはなんだか気まずい。

それはそれとして身体が重い。起き上がるのも面倒で、仰向けに寝転んだまま両手を伸ばした。アルヴァンの三角の耳がぴくりと動いて、ため息がこぼれる。

「……嫌ですよ」

「嫌よ。起こして」

しばらくの睨みあいの末、太く逞しい腕がわたしの身体を抱き起こした。洗いたてのシャツの清潔な香りがする。

「まったく、いつまでこうやって俺に起こさせる気ですか」

「アルヴァンがお爺ちゃんになるまでかしら」

「そんな歳になるまで俺を傍に置くつもりで？」

「当たり前でしょ？ あなたはわたしのものなんだから」

わたしを軽々と抱き上げて運ぶ彼が、控えめに飲んだ息をため息として吐き出した。そんなに嫌そうにしくなくてもいいじゃない。

む、と唇を尖らせると白と淡い金を基調とした、可愛らしい部屋の真ん中

に位置するソファに降ろされた。そばに立つ彼は見上げるほど大きく、色彩も何もかもがこの部屋では浮いている。

——ほんと、格好いい。べつに見ただけで好きになったわけじゃないけど、それでもやっぱり素敵。

夜を切り取ったような黒髪にヘーゼル色の切れ長の瞳。周りの男性と比べても上背が高く、鍛え上げられた分厚い肉体は常にきっちり執事服に収められている。注意深く立った三角耳に太く力強い尻尾、滅多に見ることはない鋭い牙が格好いい。はじめて会った時から素敵だと思っただけで、彼への想いを自覚してからそれは加速したように思う。わたしはアルヴァンのことが異性として好きなのだ。

「そんなことを言っていると、今日も纏まりませんよ」

「……分かってるわよ」

はあ、と今度ため息を吐くのはわたしの方だった。

今日はお見合いの日なのだ。それも四回目の。今日とはある侯爵家の次男との予定で、お昼すぎには支度を整えて出迎えなくてはならない。

「気が重い……」

貴族の責務とはいえ、よく知りもしない男性と結婚することにはとても積極的にはなれない。

——だって、どう考えてもアルヴァンより素敵な男なんていないし。

それに加えてわたしは伯爵家の次女なのだ。いずれは兄がうちを継ぐし、お姉さまも去年嫁いだばかり。父と母もそこまで権力や地位に執着はなく、わたしに政略結婚を勧めてきているわけでもない。なんなら好きだけ実家で暮らしていればいいとまで言ってくれている。それでも懲りずに気の乗らないお見合いを繰り返しているのは。

「そう言わずに。今回のお相手とはきつと上手いききますよ」

「はあ……」

穏やかに微笑むこの男への恋心を断ち切るため。いくら勝算が低い片想いとはいえ、こうまっすぐに応援されては心も折れてしまうというもの。

——嫌になっちゃう。どうしてそんな穏やかな顔してられるのよ。わたしが別の男に好きにされてもいいってわけ？

寝起きで空っぽのはずの胃がずしりと重く感じる。眠りが浅いせいか、身体が怠くて頭がぼんやりする。まだ身体の奥の方が熱っぽい。

——それだけお見合いが嫌ってことね。

自分に嘘はつけないということに、小さく笑う。後ろで手を組んで立つアルヴァンを見上げると、その瞳にわずかな心配の色が浮かんでいた。

「大丈夫ですか？　気分が優れないようですが」

「あなたのせいだね」と言えたらどんなに楽だろう。言えるわけがない。でも我慢するのも癪で、代わりに両手を伸ばした。

「またおかしな夢を見たみたい。お風呂まで連れて行って」

「また、ですか……心配ですね。今夜はいつもより早めに寝室に戻るよう、手配します」

「……うん」

薄く眉間に皺を寄せて、そっと抱き上げてくれる。宝物を扱うような仕草にドキドキした。

わたしのお見合いを応援しながらこうして甘やかして、わたしを何より大切なものだと扱うのだから、その度に嬉しくて苦しくて、頭がおかしくなり

そう。

——アルヴァンの番になれたらいいのに……。

太い首にぎゅっと抱きついて目を閉じた。隙のない清潔な香りを取りこぼしてしまわないように、静かに深呼吸をする。



自室の大きな窓の外に広がる美しい庭を眺めながら、何度目か分からない  
深いため息を吐く。

相変わらず外はよく晴れていて、絶好のお茶会日和だ。庭の花は見頃を迎えていて、歩くだけでその甘やかな香りに包まれるに違いない。陽射しは穏やかで風もなく、例えば男女が語らいながら歩くにはもってこいの陽気。ほんの一時間前まで、自分があの庭の一幕で男性とおしゃべりしていたなんてとても信じられない。



——またダメだったわ。

テーブルに頬杖をつく、もう一度ため息がこぼれる。四度目のお見合いもダメだった。親の言うことを真に受けていつまでも実家で気楽に過ごすわけにはいかないし、このままでは不毛な恋に身をやつしてしまう。多少のことは目をつぶってでも結婚しなくては。そう思うだけで寝不足の頭がじんわりと痛い。

「もう」

どこにもぶつけられないやる瀬無さに呟くと、白いクロスがかけられたテーブルに華奢なティーカップが滑りこんでくる。静かに揺らめく水色すいしょくには、天井のシャンデリアが映っている。紅茶のふくよかな香りを打ち消すのは、アルヴァンの低い声だ。

「お嬢様、ため息を吐くと幸せが逃げますよ」

「ため息吐かなくても逃げちゃったのよ」

視界のすみでふわりと黒っぽい毛皮が揺れた。アルヴァンの尻尾だ。

カップを持ち上げて控えめに口をつけると、紅茶の香りが鼻に抜けていく。アルヴァンが淹れた紅茶は何より美味しい。この屋敷の中で、いや、王都中を探してもこれ以上の腕前を持つ執事はいないかもしれない。

すーっと頭痛が引いていく美味しさに、ほう、と息を吐くと、アルヴァンは「お嬢様」と控えめに言った。

「なあに？」

「先ほどのお相手——……ハミルトン侯爵家の次男坊に嫁ぐことが、お嬢様の幸せだったのですか？」

「そんなわけではないじゃない」

“あれ”との結婚が幸せなわけじゃない。あんなひよろひよろの、宝石さえ渡せばわたしが喜ぶと思っっている軟弱な男。

金糸のような髪は確かに美しいと思っただけれど、一番近くにいる男が群を抜いて屈強なせいで、貴族のお坊ちゃんらしい細身の男性に全くときめかない。

——しかも彼ったら、わたしの手をとった瞬間血相を変えて逃げ出すんだもの！

思い出しただけでムカムカしてきた。出会い頭では山ほどプレゼントを出して、胸焼けするくらい甘ったるい言葉を吐いて口説いてきたくせに、手の甲にキスをする直前でいきなり、なにかに怯えるように逃げ出したのだ。

「ねえ、さっきのあれ、なんだったと思う？」

「さっきの、と言うと？」

「どうしてわたしの手に触れるなり逃げ出したんだと思う？」

アルヴァンは「ああ」と頷いたあと、その大きな手で自分の口元を覆った。

「……なんで笑ってるの」

「まさか」

彼は笑う時、必ず自分の口元を隠す。それは、

——わたしに牙を見せないようにするため。

一度目のお見合いの時、相手の男性がわたしの肩を半ば強引に抱いた際にアルヴァンが大きく唸ってしまった。抱き寄せられて驚いたわたしが小さく「痛い」と言ってしまったばかりに。牙を剥いて低く唸る彼に驚いたお見合い相手はそのまま退場、その日のうちに断りの手紙が届いた。わたしとしては有り難い手紙だったけど、アルヴァンは責任を感じてしまって……それっ

きりお見合い相手を威嚇することはなくなつた。

——わたしは別に気にしてないのに。

ついでにわたしにも牙を見せることはなくなつた。アルヴァンはわたしは彼の牙や唸り声にも怯えたと思ひ込んでゐるらしい。彼の身体や振る舞いに嫌なところなんてなにひとつ無いのだから、さみしい話だ。

「笑つてませんよ。ただ」

「ただ？」

両手を後ろで組み直したアルヴァンが、わずかに口角を上げた。

「ざまあないな、と思つただけです」

「笑つてるじゃないの」

答える代わりに尻尾がゆらりと揺れた。とんでもない自制心によって制御されている彼の尻尾は犬のように振れたりしない。どんなに嬉しくても、勝手にそうならないようにしているんだとか。それを振るということは彼の氣遣いであり、わたしに氣を許している証拠でもある。

——本当、こういうことされると諦めがつかないわ。  
カップをソーサーに置いて、小さく息を吐く。

「お見合いなんて、もうやめちゃおうかしら」

ぽつりと落とした言葉に、アルヴァンはかすかに目を細めた。

「次回もつといいお相手が現れるかもしれませんよ。お嬢様好みの頼りになる殿方が」

「嫌よ」

食い気味に否定してしまったことに自分でも驚く。けれど、一度開いた口は止まることなく言葉を紡ぎ出した。

言うべきではないと頭では分かっているのに止められない。どうしてアルヴァンはいつも通りの顔をしていられるの。わたしが誰と結婚しようとか関係ないみたいな顔をしていられるの。あなたにだけはそうされたくないのに。疲れた心と身体が思考を黒く蝕んでいく。

「……わたしが誰のことを好きなのか、知っているでしょう？」

声が震えて静かに落ちる。

「……お嬢様」

厳しさを孕んだ声を吐くと共にぴくりと狼の耳が動いたのを、目の端で見た。それに気がつかないフリをして続ける。彼がこの先の言葉を聞きたくないことを知っているのに、止められなかった。

「よく知らない人と結婚するなんて嫌。わたし」  
「いけません」

制止の声にも喉の奥が熱くなる。

どうして止めるの、わたしに好かれていることがそんなに嫌？ ああ、もう、そんなこと分かりたくないのに。

ぎゅうっと締め付けられた喉が痛い。声は悲痛な響きを帯びて口から出た。

「わたし、アルヴァンと結婚したいの」



あえて顔を見ないようにして言い切った。見なくても彼が困っていることが空気で分かる。今までの朗らかなそれが嘘のように、部屋全体が重く沈んでいく。息をするのもやっとなほどの静寂がわたし達を包んだ。後悔の念と虚しさが、胸のあたりまでせり上がってくる。

——だって、嫌なものは嫌なんだから。アルヴァンが好き。好きな人と結婚したいって思うことの何がいけないことなの？

残った紅茶に映るわたしは泣きそうな顔をしていた。

「わたし、あなたのことが好きなの。本気なの」

産まれて初めての告白は、あまりに静かに小さく落ちた。か細く、今にも消えてしまいそうな声だったけど、きつと彼の耳はそれを拾っただろう。狼の耳は人間のものよりずっとよく聞こえるのだから。小さく息を呑む音がして、それから色のない声で言った。

「……お嬢様と俺では、身分が違います」

「あなただって貴族でしょ」

「伯爵家と子爵家では釣り合いが取れません。ましてや俺は三男で、こうして奉公に出ている身です」

「今日会ったハミルトン家の方だって次男坊よ、わたしだって家を継ぐわけじゃないんだから身分なんて関係ないわ」

見上げた顔は驚いているようにも、困っているようにも見えた。ヘーゼル色の瞳が切なげに細められて、言葉を飲み込むように太い喉が上下する。

——どうしてあなたがそんな顔をするの。

なにか言って欲しいのに、なにも言って欲しくない。そんな気持ちになる沈黙を、アルヴァンが破った。

「……獣人と結婚するということは、番になるということです」

低く押し殺した声が、まるで自分に言い聞かせるように言う。

「狼の番は死ぬまで、……死んでも解消されません。狼は番に異常に執着するんです」

「そんなの、分かってる」

「いいえ、分かっていません」

「どうして……!!」

強い否定に涙が滲む。どうしてそんなことを言うの、と聞きたいのに喉で言葉が潰れて声にならない。

人間と獣人の婚姻システムが違うことも、番になることがどういうことなのかも、自分なりに勉強してきた。それが上っ面の知識であることは認める、

でもそれを彼に否定されることはあまりに悲しかった。お互いを理解する気がないと、そう言っているのと同じことだからだ。

思わず彼の腕に縋る。太い腕はわたしが急に掴まったところでびくともしない。その逞しさが今は胸を締め付けた。

「……あなたの番になれたら、いいのに」

太い尻尾が一瞬、ぴくりと小さく動いて、そして止まった。こんな時も決して揺れることはない尻尾が恨めしかった。



「アルヴァン、おやすみなさい」

「おやすみなさいませ、よい夢を」

寝る前のお茶を片付けたアルヴァンが、お決まりの挨拶を交わして寝室から去っていく。

わたしはレースをたつぷりと使った天蓋付きのベッドに仰向けに寝転がった。昼間のあの言い合いのあと、散々泣いて、そしてアルヴァンに慰められた。失恋相手に慰められるって、どんな状況？　と言いたくなるけれど、わたしを泣かせることができるのも、泣き止ませることができるのも彼一人なのだ。

「嫌になっちゃう……」

あくびが混ざった息を吐いて寝返りをうった。薄いピンクのネグリジェが素足に触れて気持ちいい。

こここのところよく眠れていないせいか、ベッドに入るとすぐに眠くなって

しまう。どこからかアルヴァンが仕入れてきた「安眠のお茶」とやらが効いているのかもしれない。一週間ほど飲んでみた結果、素晴らしく寝つきが良くなっただけで、相変わらず変な夢は見続けているのだけ。

「きつと男の人のことばかり考えているせいだわ……」

肺の中の空気を、一気に全部吐き出す。

——今夜も、また……お見合いの前後は特に酷いのよ、ね。

仰向けになってお臍の下を撫でる。奥の方がじくりと疼いて吐息が熱く濡れた。無意識のうちに太ももをすり合わせてお腹を撫で続ける。

「ん……っ……は、あ……」

足の間にじんわりと熱が集まって濡れてくる。

わたしは夢の中でも動けなくて、ただひたすらに乳首やおまんこを舐められる。そんな夢を見る日は眠っている間も身体に力が入るのか、起きてもまったく疲れが取れていない。それだけならまだしも、夢の内容を思い出すだけで身体が疼いてしまうようになったのだから困りもの。今だってもう眠ってしまいそうなのに、下半身の熱を持て余してしまっている。

「あ、あ……もう……いや……」

お茶の成分が効いてきたのか、目蓋がどんどん落ちてくる。腰を揺らして誤魔化しているうちに、いつの間にか眠ってしまっていた。



——あ……また……。

今まで何度も感じた違和感に意識が揺れる。

薄いネグリジェの上から胸をやさしく撫でられて、するするとりボンが解かれる。簡単に前がはだけて寒気を感じるのとはほとんど同時に、ぬる……♡と熱くて濡れた何かが肌を嬲った。胸の輪郭をなぞって、それから表面をぬるぬると優しく撫でる。そうやって胸全体を嬲ったあとは乳輪をくるくると弄ぶ。

くすぐったくて身を振りたいのに、両手も両足も何か重いものに押さえつけられていて身動きが取れない。

「っ……んん……ッ♡」

夢だと分かっているのに、何度経験してもこの生々しい感覚には慣れない。まるで何かに舐められているような、啜え込まれているような。それが触れている場所は熱いのに、不思議と背中がぞくぞくする。特に乳首をそうさ



れるとむず痒い刺激まで加わって、身を振りたくなる。

ぬる……♡ ぬる、ちゅ……♡  
ぢゅ♡ ちゅ♡ ぢゅ、う……♡

「……ッ♡」

ちくび、吸われて……る……？♡ やだ、変な感じ……♡♡  
胸を食べるみたいに大きく咥えられて、先っぽを、ちゅ♡ ぢゅ♡ 音を  
立てて吸われている。刺激されて硬く膨らんだそれは自分が思っている以上  
に敏感で、ねっとり粘膜が絡むたびに震えてしまう。

「……は、……可愛らしい。感じてるんですか？ 俺に舐められて、吸われ  
て……ああ、頬を赤らめて。熱くなってきたんですね」

アルヴァン……？ やだ、わたし……アルヴァンの夢見ちゃってる……！  
妙にリアルな声にびっくりと身体が跳ねる。目を開けられないせいで確認は  
できないけど、好きな人の声を聞き間違えるはずない。気持ちを抑えすぎ  
て、ついにこんなえっちな夢にアルヴァンを登場させてしまった。いよいよ  
人に相談できない内容になっていく罪悪感に喉の奥が締まる。顔を覆いたく  
なっても、指先しか動かなかった。

……？ 手首、掴まれてるの……？

「どうしたんですか？ 恥ずかしい？ ……何も恥ずかしいことなんてない  
ですよ。全部俺が時間をかけて、お嬢様をこうしてきたんですから……」

「ッ……あ♡」

ぢゅう♡ と音を立てて乳首を吸い上げられて背筋が戦慄く。身体の内

側が甘く痺れて、お腹が重くなる。腰がじんわりと疼いて足の間に熱い何か  
が滲んだ感覚がした。

どうも手首は掴まれてベッドに縫い付けられているようだった。この夢で  
はわたしにアルヴァンが跨がっているせいで下半身も動かせない……ことに  
なっているらしい。都合のいい夢の中で感じる体温は妙にリアルで、胸を舐  
め回されると肌が濡れたような感じさえした。

「……ん。今夜は早いですね。もう欲しくなりました？」

なんのこと……？ ……っあ、あ♡ やだ、……っそんなところ……♡  
アルヴァンにされるのは、いや……っ♡

前開きのネグリジェはもう袖に腕が通っているだけで、裾なんて簡単に捲  
り上げられてしまう。アルヴァンは身体を下げると、足の間に潜り込んだ。  
足が彼の肩に掛けられて押さえられる。秘部を晒す恥ずかしさに肌が熱くな

った。

いつも夢では胸や首の周りを執拗に舐ったあと、”そこ”も同じように弄られる。お決まりの流れだとは言え、好きな人にそうされるのはあまりに恥ずかしい。なんとか逃げようとするけれど、相変わらず身動きは取れないし、目が覚めることもなかった。

ぢゅう……っ♡ ちゅ♡ ぢゅ♡

れろ……♡ むぢゅ♡ れ、え……♡ ぢゅるる……♡

「は、あ……今日は随分感じてるんですね。いつもよりずっと濃くて、よく濡れている。ここももうこんなになって……乳首、気持ちよかったですか？」

ざらついた舌が陰唇を舐めて、ぴったりと唇を押し付けてあふれる蜜を啜

り上げる。

ぞくぞくと背筋が震えて、腰がとろけそうなほどの快楽が押し寄せてくる。舌先がクリトリスをつついて、ちゅ♡とキスされた。

くっ♡ あ、あ♡ きもち、い……♡ おまんこ、ぬるぬるされるの好き、好き……♡ あ♡ クリトリス吸うの♡ んうう……♡ ちゅ♡ ちゅ♡ っ♡ ってされるの、きもち……♡

覚えのある快感と愛撫の手順に、これは夢なのだと分からされる。今まで何度もされてきたのと同じように、やさしくおまんこをぬるぬると舐められて、クリトリスを愛でてもらう。相手がアルヴァンなはずではないと思いつつも、都合よく聞こえる彼の声によっていつもよりずっと感じていた。

「可愛い……腰、動いてる。お嬢様は人間なのに、寝ながらこへこ腰を振るなんて……はしたないですね」

「——っ♡」

「はじめの頃は濡れるまで時間がかかったのに、今ではすっかり気持ちいいことが好きになって。どうするんですか？　こんな助平な令嬢を娶る男なんて俺しか居ないですよ」

べろ……♡　と大きくおまんこが舐め上げられて、熱い吐息混じりの声がクリトリスを撫る。ひくひく♡　と期待に震えてしまっていたのか、軽く笑った気配がした直後、丸ごと咥え込まれてしまった。

ぢゅうう……ッ♡　ぢゅ♡　ぢゅぞぞ……っ♡  
ぬぢゅ♡　ぬこ♡　ぬぢゅ♡

「……っ♡」

……ッあ♡　あう♡　これすご、……っ♡　クリトリスごと食べられち

やてる……っ♡ ん、んっ♡ お♡ お口でクリトリス扱かれ……っえ♡  
あ、あ——♡……っ♡ にゅこにゅこ♡ すごい……♡♡

舌がべったりとクリトリスの裏側にくっついて、そのまま咀嚼する動きでもみくちやにされる。口も動きにくくなっていることは幸いだった。こんなの、口が自由だったらみっともない声が出ちゃってる。ただ手足以外はある程度自由があるのか、腰が浮いてしまう。アルヴァンの口におまんこを押し付けるように突き出すと、ぢゅうッ♡ 一際強く吸い上げられた。

「ッ♡ っう♡」

「は、あ……♡ 悪い人ですね、本当に……こっちはもう我慢できなくて頭がおかしくなるそうだっていうのに……」

強い刺激に甘イキして、夢の中だというのに頭がぼんやりする。遠くで何か——……シーツを撫でるような規則正しい音が聞こえてくるのは一体何だ

ろう？ 例えるなら犬が思いきり尻尾を振っているような、そんな音が聞こえる。アルヴァンは決して尻尾を振ることはないから、これは夢の中なのだと突きつけられて仄かに胸が翳った。

そうして意識がふわふわと揺れ出すのを引き止めるみたいな衝撃が、唐突にお腹に來た。べちんっ♡ と熱くて重いものが乗ったのだと、一拍遅れで理解する。

「分からないですよね、俺が毎日どんな想いで、どんな目であなたのことを見ているのか。……分からないようにしているんだから、知らなくて当然なんですけど」

え……？ なに、なに……っ♡ あっ？♡ なにこれ……っ♡

アルヴァンが何か言っているけど、そんなことより熱いもので、ずりずり♡ おまんこを擦られる刺激に意識が向いていて、何を言っているのか全く



理解できない。

ぬちゅぬちゅ♡ 粘膜同士が絡み合って、得も言われない快感が下半身に広がった。空っぽの膣がきゅうっと切なく窄まって、愛液が外に押し出される。

「……………ああ、またこんなに濡らして……………俺に匂いを付けたいんですか？ そんなことしなくても、俺はお嬢様のものですよ。今朝自分でそう言ったでしょう？」

「ん……………あ……………♡」

膝の裏を押さえて、むき出しになったそこを何度もおちんぽで撫で付けられる。

ぬちゅぬちゅ♡ と粘着質な水音と色っぽい男の息遣いが響いて、それがまた背徳感を煽って快楽に結びついていく。

あ♡ あ♡ これすごい♡ きもちい……っ♡ お♡ 夢なのに……っ♡  
ああ♡ ん♡ アルヴァンのおちんぽで、わたし気持ちよくなっちゃって  
る……っ♡

ぽってりと膨らんだクリトリスを巻き込まれて、びくんっ♡ と身体が跳  
ねた。

「ここ好きですよね。何度も何度も可愛がったせいで、すっかり大きくなっ  
てしまっ……俺のせい、ですよね……っ♡」

ぐりぐり♡ 捏ね潰されて閉じている膣の裏が弾け、足の先が伸びる。  
フー……♡ と深く熱い息を吐きながら、アルヴァンは腰を揺らした。

ぬぢゅ♡ ずぢゅ♡ ぬぢゅぬぢゅ♡  
ずりゅ♡ ずりゅ♡ ずりずり♡ ぬぢゅぬぢゅ……♡

「ッ、……っ♡」

きもちい♡ きもち、い♡ い♡ い♡ い♡ いったやう♡ また夢の中でいく♡  
い、く……っ♡

規則正しく力強い律動に導かれて、簡単にイってしまった。全身を快樂の波に揉まれてどうにかなってしまいそうなのに、それを伝える術も逃げ出す事もできなくて、まだ続く甘い責め苦に呼吸が喘いだ。

「——……ッ♡ 寝ているのにそんな顔されたら……っ、ぐ」

ぐっと腰を押し付けて苦しそうな声が聞こえた後、お腹の上に粘ついた熱が広がった。

びくびく♡ 震えるおちんぽから、ぶびゅ♡ びゅく……♡ あふれて中

々止まらない。それが一体何なのかを考えるより早く、首筋をべろりと舐め上げた。

「…………お嬢様」

痛いほどの切なさを持った声を最後に、夢はそこで途切れた。



「おはようございます、お嬢様」

「……………っは」

いつもと同じ、よく通る低音によって目が覚める。

ベッド周りのレースカーテンの向こうでアルヴァンが部屋のカーテンを開

けているのが見えた。

——ッ！ 昨日の……っ。

朝陽を頬で受け止めてすぐ、勢いよく身体を起こす。昨夜見た夢があまりにリアルで、もしかしたら夢じゃなかったのではないか、と思ったのだ。

きちんと着ているネグリジェを思い切って捲り上げてみる。胸にもお腹にも、なんの変化もなかった。いつも通りの白い肌がそこにあるだけ。間違っても何か、体液のようなものが付いた痕跡はない。

「……お嬢様？」

「ひゃっ」

慌てて服を戻して振り向くと、怪訝そうな顔をしているアルヴァンが居た。いつもと同じ表情が乏しくも整った顔に真っ直ぐな三角耳、皺ひとつないシャツに微動だにしない尻尾。いつも通り、性的な香りなんて一切ない完璧

な鋼の執事の姿で。

——やっぱり夢、よね。

わたしに覆い被さって尻尾を振っているあれは、間違いないわたしの欲望を反映させた都合のいい夢。

その証拠にわたしの身体もベッドも、眠る前と何も変わらない。寝ぼけていた頭が急激に冷えて冴えていく。わたし、なんてものを見ちゃったんだろう。

「気分が優れませんか？」

「……う。ううん、大丈夫」

心配そうにわずかに眉を寄せるアルヴァンに、罪悪感がこれでもかと積まれていく。

純粹にわたしを、護衛対象であるわたしを大切にしてくれている彼にこん

な……卑猥な願い混じりの想いを抱くなんて間違っている。

——もう、本当に辞めよう。

なんだかんだ、今までは本気で結婚相手を探していなかった。結婚はアルヴァンとしたいって思っていたから。

でももう辞めだ。今度こそ本気で婚活し、真剣にお見合い相手に向き合つて、健全な結婚をしてアルヴァンをわたしから解放する。いつまでも子どもの駄々をこねているわけにはいかない。

——……それが一番いいの。きつと、お互いに。

胸が痛い。喉の奥がざらついて、熱くなつた目頭をそつと押さえた。

「大丈夫じゃないでしょう。横になってください、今医者を——」  
「アルヴァン」

わたしの肩に触れた手が、かすかに動いた。胸が張り裂けそうなほど辛い

のに、彼がわたしの声を聞き漏らさないようにしてくれている事が、こんなにも嬉しい。

顔を上げて、わたしはアルヴァンに微笑んでみせた。隙のない、完璧な令嬢に見えるように。

「五回目のお見合いをするわ。お父様に話を通しておいてくれる？」

ヘーゼル色の目が、大きく見開いた。そこに映ったわたしは、少しだけ大人びて見えた。



五度目のお見合いはとんとん拍子に決まった。

今度のお相手は同じ伯爵家の長男で、三つ年上の人。数年前まで婚約者が



居たが、どうも最近別れてしまったらしい。破局の理由は聞いていないけど、聞いたところでわたしの気持ちは変わらないのだからそれでいいだろう。

人間性に問題がなさそうであれば即婚約。向こうだって貴族なのだし、さつさと結婚してしまいたいはず。愛のある結婚を夢見たりするから、色々おかしいことになるのだ。最初から割り切ってしまえばなんて事はない。

夕食と入浴を終えて自室に戻る途中で、ふと顔を窓を見る。外はもう暗くて、月が眩しいほど大きかった。

——明日、ね。

明日もまたあの庭でお見合いをすることになっている。天気が心配だったが、この月であれば明日も晴れそうで安心する。

「……失敗しないようにしなくちゃ」

もう顔を合わせただけで逃げられる、なんてことにならないようにしなく

てはならない。

寝る前に鏡の前で笑顔の練習をしてみようか。明日着る予定のドレスをもっと清楚なものに変えてみるべきか。そんなことを考えていると、わたしの部屋の扉のところで立っているアルヴァンが見えた。

……？ まだ呼んでいないのにどうしたのかしら。……というか、すごく怒ってる……？

厳しい表情で、真っ直ぐにわたしを見ている。怒りを堪えているような顔に、思わずたじろいだ。

「……お嬢様」

「な、あに、アルヴァン……怒ってるの？ わたし何もしてないわよ」

扉の前に来ても、いつものようにそれを開けてはくれない。

後ろで手を組んでじっと見下ろしてくる。じりじりと熱を帯びた視線に、

背中が冷たくなったのを感じた。

「ねえ、どうしたの」

「明日はあの男と会うのですか」

「え？」

いつにも増して抑揚のない声が重く響く。わたしの予定をすべて把握しているアルヴァンが、どうしてそんなことを訊くのだろう。わけが分からなくて黙っていると、苛立ちを隠さない声で追撃が来た。

「伯爵家の長男と、結婚なさるおつもりですか」

分からない。

真っ先に抱いた感想はそれだった。

なぜ彼が苛立っているのか、何にそんなに怒っているの。どうして。

——どうして、アルヴァンが悲しそうな顔をするの？

怒りに歪んだ目の奥では、悲しみの色が広がっている。あまりに悲痛で、荒立った海のような黒さが滲んでいた。

「待って、アルヴァン。どうしたの？ わたしの結婚を応援していたのは、あなたでしょう？」

声が震えている。はじめて見た顔に怯えているのか、それとも感情が揺さぶられた末にそうなったのか、自分でも分からなかった。アルヴァンはこちらに向けていた耳を一度後ろに倒し、そして一瞬の隙にわたしを片腕で抱き上げた。

「きゃ……っ!?」

「静かに。……誰の足音もしないので、邪魔は入らないと思いますが……他人に見つかることなので」

切れ長の瞳が獲物を捉える狼の鋭さで、ぎらりと光った。

「中でなら、いくらでも声を上げて結構ですよ。……あなたがそうできるかどうかは、分かりませんが」

わたしを抱えたまま、アルヴァンは寝室に足を踏み入れた。